

Digest of Science of Labour

労働の科学

2024

May

Vol. 79, No. 5



無責任な泉,1986 / 菅沼 緑

特集

労研を支えた人たちの群像(その2)

「聞き書き」から労研の歴史を紐解く
井上和衛 / 木村菊二 / 越河六郎

連載

タイプライターの歴史とタイピスト⑤
三宅章介

歌舞伎で生きる人たち その二十四
湯浅晶子

巻頭言

暉峻義等さんを葬った総墓に想う
斉藤 進

労研アーカイブを読む⑨
椎名和仁

自由と想像⑱
菅沼 緑

ILOインド南アジア産業安全保健通信⑰
川上 剛

労働の科学



巻頭言

俯瞰 (ふかん)

暉峻義等さんを葬った総墓に想う

齊藤 進 [大原記念労働科学研究所 主管研究員]

1

表紙作品：菅沼 緑「無責任な泉, 1986」

材料：木

会場：ギャラリーホワイトアート（東京・銀座）

年度：1986年

撮影：安斎重男

表紙デザイン：大西文子



労研を支えた人たちの群像(その2)

私と労研

思い出すままに

[大原記念労働科学研究所 元研究部長] 井上 和衛 6

つれづれなるままに思い出すこと

[大原記念労働科学研究所 元副所長] 木村 菊二 15

学びあった懐かしい日々

[大原記念労働科学研究所 元副所長] 越河 六郎 21

Series

〈シリーズ〉日本スポーツ健康科学学会における職域の熱中症予防の取り組み(2)

造船業における熱中症対策 小島 信樹 28

ILOインド南アジア産業安全保健通信(17)

インド, ビハール州パトナの建設安全衛生トレーニング 川上 剛 31

Series

- グリーフケアとリーガルケア (4の2)
 児童生徒編 (自死事案編) 細川 潔 34
- タイプライターの歴史とタイプスト (5)
 —タイプライターの普及の社会経済的状况と女性の職業的解放—
 三宅 章介 36

Column

- 労研アーカイブを読む (99)
 労働科学関連の文献を概観して
 —人間の疲労と障害:世界の安全衛生名著全集 [ハワード・バートレイ著] — 椎名 和仁 44
- 自由と想像 (17)
 無責任な泉, 1986 菅沼 緑 51
- KABUKI
 一谷嫩軍記～熊谷陣屋
 歌舞伎で生きる人たち その廿四——啖啄同時 湯浅 晶子 52
- BOOKS
 『よみがえる天才8 森鷗外』
 鷗外が追求した「美の世界」..... 椎名 和仁 56
- 労働科学のページ 57
- ろうけん川柳 63
- 次号予定・編集雑記 64



俯瞰 ふかん

暉峻義等さんを葬った総墓に想う

齊藤 進

私は、いま八十歳を迎えています。今更、祝うべきことは何もありません。それでも、最近、存在に気がつかなかった文書等を思わぬことから読む機会を得て、知らないことを知るといふ嬉しい経験をしました。以下、いくつか例を述べますが、労研らしく敬称は略します。

1910年に生まれた私の父・齊藤一は、1935年に東大医学部を卒業、直ちに大先輩の暉峻義等が率いる倉敷労働科学研究所(以下、労研)に入所しました。農村医学の泰斗、若月俊一と大学同期です。父は、労研一途に研究員、顧問等を歴任し、2014年に亡くなりました。享年104歳。

倉敷労研から祖師谷労研へ

私は、倉敷から世田谷区祖師谷に移転していた労研の二間の社宅で、齊藤一と美知子を父母に、1944年に生まれ育ちました。東北地方で学生や教員生活を過ごし、1982年に妻の治子等、家族ともども老いた父母のもとに戻りました。十年以上前に両親を見送り、私自身も余命を知り、実家に残る父母の遺品を整理することになりました。

父・齊藤一の遺品整理

我が家には、父の蔵書のドイツ語やラテン語等の医学書も多く、以前、医学書を引きたる古書店をネットで探し、段ボール数箱で送りましたが、活用されて

いないようでした。私自身の人間工学や、父の労働科学に関係する膨大な書籍類は、先方の了解を得て産業医大と労研に宛て、宅配便十箱で引取って頂きました。齊藤一の遺品整理をしているなかで、私が感銘した文書が二、三あります。桐原葆見が、重篤な病に臥している旧友石川知福との最後の別れ際に、「死んだあとにのこしたいから(199頁)」と仰臥した石川に頼まれた遺稿をまとめた「随想(昭和26年労研発行)」がその一つです。

石川知福と桐原葆見の随想

旧制松山中学出身のアララギ派の歌人でもある石川知福は、桐原葆見と倉敷労研の同僚で友人でもありました。桐原は、随想のあとがきで石川を評し、「けん虚であったが故にゆたかであったこの友の心の姿は、いつまでも私に安らかな愉しい思い出である(200頁)」と記しました。随想の巻末には、「跋として義等が、この小冊子が石川君が私に遺してくれた最良の「かたみ」になった(197頁)」と記されています。暉峻・石川・桐原は、倉敷労研発足時の同僚でした。

義等はこの跋で、義等らしからぬ弱音を吐露しています。曰く、「わが親愛なる同僚は何故か労働科学という言葉を使問の言葉として使った人はなかつたのである。私はそれを限りなく淋しく思ひつけて来たのである。(196頁)」。石川は、



さいとうすすむ
大原記念労働科学研究所 主管研究員
IEA国際人間工学学連合フェロー

旧制第七高等学校、東大医学部生理学教室、倉敷労研と、義等の後を追った後輩でした。石川を追悼する跋の執筆に、義等は、思わず鏝を脱いだように私には思えます。

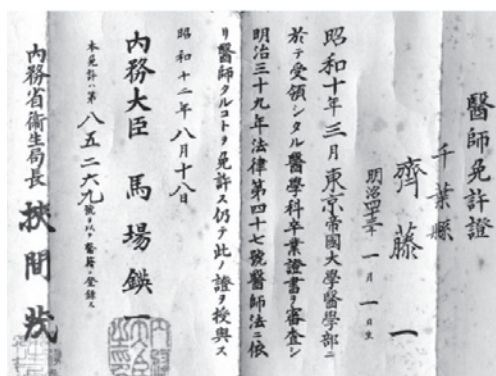
心に残った他の一つの文書は、義等が学生るとき生まれた暉峻凌三が、義等の没後に著した次の文書です。

暉峻凌三が語る父・義等のこと

父・暉峻義等のこと(1、2、3・完)を表題とした義等の長男、暉峻凌三の別刷りが遺されていました。表紙に留めた凌三の名刺に、「齊藤一先生 日本労働協会勤務の旧友に強制されて書いた雑文でありますが。『労働資料』(日本労働協会刊行、68年3月〜5月)複写 11/V、(68)」と凌三のメモがあります。この資料は、現在の労働政策研究・研修機構の

労働図書館にあることを確認しました。凌三が遺したこの資料で、在野の「街頭の学」を謳っていた義等を彷彿とさせる箇所も多く、以下、同資料No.39、9頁の一部を抜粋、転記します。

・義等は、1930(1931年)ころ、東大衛生学教授の横手千代之助の後任に擬せられたという。1931年にシベリヤ經由、陸路ジュネーブの国際産業医学会議に出た。広漠たる原野を行く旅行の途次、父はじぶんが官学教授などに向く人間ではないと熟とおもいに決心した、という私信をジュネーブから家族に発している。
・父は官途に就いたことはない。：結果として太平洋戦争に協力し、公職追放に遭った。



▲医師免許証

・遺族は義等の墓を設けず和田堀本願寺の「総墓」(コミュニオン)に葬った。経済的理由もあるが、同朋との談合を愉みとした人間好きの義等にふさわしい、ともかんがえられたからである。以上は、義等の長男で当時、東洋大学哲学教授の凌三が、父・義等について遺した文書からの転記です。なお義等は、享年77歳で、義等と人間としての親交があったと自ら言う森戸辰男芳研理事長等々に、所葬で見送られています。

卒業証書と医師免許証

最後に、母が保管していた筒入りの父の卒業証書と医師免許証につき述べます。今回の遺品整理で、その存在を初めて知りました。父は、自分は医者ではなく研究者だと、割り切っていました。おぼろげですが、私には、父が軍医だった太平洋戦争から労研内の我が家に復員してきた風景が残されています。復員後、父から戦争での体験や医者であることを、私はひと言も聞いた覚えはありません。医者は食いはぐれがないと、母からは聞いたことがあります。しかし、労研社宅で肉などめつたにみない貧乏生活の我が家では、母の食いはぐれがないというの、まったく迫力に欠けていました。魚屋さんや大相撲力士に憧れていた幼い私にとり、医者は食えない代表的な職業でした。

今回、初見した齊藤一の卒業証書と医師免許証を並べてみて、不思議に思ったことがあります。

卒業証書には、齊藤一 東京帝国大

学医学部規程ニ依り医学科ノ学士試験ニ合格シタリ仍テ之ヲ証ス 昭和十年三月三十一日

東京帝国大学医学部長 從三位勲二等医学博士 医学士 永井 潜 及び同大学 正四位勲二等医学博士 医学士 長與 又郎の角印が押されています。

一方、医師免許証は、千葉県 齊藤一に宛て、昭和十二年八月十八日付で、角印が押された内務大臣 馬場 鉄一、内務省衛生局長 狭間 茂の前面にある本文が次です(写真)。

昭和十年三月東京帝国大学医学部に於テ受領シタル医学科卒業証書ヲ審査シ明治三十九年法律第四十七号医師法ニ依リ医師タルコトヲ免許ス仍テ此ノ証ヲ授与ス、と記されています。なお、今回の文では、証書の漢字は新字体で記しました。私が不思議に思ったのは、内務省が、東京帝大の卒業証書を審査し、医師免許を与えているという文面です。医学教育と医師資格付与制度は、幾多の歴史的变化を経ていきます(坂井他、医学教育、41(5)、p.337-346, 2010)。昭和十年代という軍人・官僚国家の時代故でしょうか。官学が対等ではない関係は、医学部長や学長等、東京帝大の教育者が、位階勲等を誇らしげに並べていることの裏返しにも思えます。暉峻義等が、官を捨てて民に徹した含意を慮り、改めて義等に敬服した次第です。